

# 視認性向上策を紹介

## JAVISA 運転リスクで講習

日本高視認性安全服研究所（JAVISA、服部勝治所長）は6日、実務者講習会を開催した。北里大学で視覚機能療法学の専任講師を務める川守田拓志氏

「特に夕方は視覚の低下に気付かない」と川守田氏

が、ドライバーの視覚特性の観点から、運転上に潜むリスクや、視認性を向上させるための取り組みについて講演した。

川守田氏は、事故要因として「脇見や疲労、不注意のほか、運転時視機能によるものもある」と指摘。その裏付けとして、「日没が

早い10、12月の夕方に人対車両による事故が統計上多い。視力は暗くなると低下するが、特に夕方は明るい状態から徐々に順応しているため、視覚の低下に気付かない」と解説した。

ドライバーの視認性を高めるためには「光度やコントラストを高めることが必

要」と強調。具体的な取り組みとして①ライトの早期点灯②反射材の携行③自立つ服装の着用——などとし、「高視認性安全服が有効」と話した。

また、高齢者による事故の増加の一因である、加齢による視覚機能低下のメカニズムにも言及。「罹患（りかん）率が50歳代で全体の5割、60歳代で7割、80歳以上ではほぼ全員」と紹介した。白内障にかかると動体視力が落ちるが、「手術を受ければ、ほぼ正

常な状態に戻る」。加えて、加齢による機能低下は「長年の知識と経験で補うことができる」と述べた。

このほか、JAVISAのメンバーらが、高視認性安全服の基準や縫製、絶対

（田中信也）

